

くつろぎながら、のんびり楽しむ

漂流連歌会

俳句を愉しむにくの会（「玉翠俳句王〜にくの会・誌上句会」欄参照）のメンバーのうち、連歌の魅力に目覚めた者たちが平成25年秋に旗揚げした「漂流連歌会」。昨年の第33回東京玉翠会の同好会通信欄では、秋発句の

歌仙を巻くことと変幻自在の半歌仙を巻くことを目標として掲げていましたが、諸般の事情により後者の目標は未達成で、今後の宿題となりました。

昨年9月の第5回興行では、半日かけて歌仙（36句）を巻きました。今回の連歌で詠まれた場面・人物や時代の転変を拾ってみると、有名人では、藤原道長、西行法師や松尾芭蕉、果ては姐己（九尾の狐の化身）やらメルヘンの主人公まで登場し、時代は、現代から江戸時代、平安時代、さらに約三千年前の中国古代まで自在に往き来し、連歌の華ともいふべき恋句では、淡い初恋から激しく燃える恋、しみじみとした恋、男色の恋まで様々な恋模様

が出現しています。「歌仙は三十六歩なり。一步もあとに帰る心なし。」（松尾芭蕉）の境地にはまだまだ遠いですが、それなりにダイナミックな展開になっていると思いませんか。（←自画自賛、失礼いたしました。m(_ _)m）

「漂流連歌会」では、独自の「膝送り・廻り宗匠+衆議判」システムに則り、参加者（連衆）の共同作業で会を運営しています。このシステムでは、連衆が順番に出句していきます（膝送り）が、特定の宗匠を決めず、出句の番になった人が宗匠役となり（廻り宗匠）、自分一人で作句するもよし、他の連衆のお知恵を拝借して作句するもよしとして、他の連衆もこれに対し自由にコメントしたり代案を

出したりしながら（衆議判）、進めていきます。自分の番が終わると、1時間くらいは、他の連衆の作句の苦労を肴にお酒でも吞んで寛ぎながら、あれこれツツコミを入れたりしてノンビリ楽しむことができます。

座の文芸、即興の文芸といわれる連歌の面白さは、連衆によるコラボレーションの場である連歌会を体験して初めて実感できるものです。とはいえ、なかなかハードルが高いというのが実際のところかもしれません。漂流連歌会では、上記のとおり和気藹々とした雰囲気の中で会を進めており、連歌は初めてでどうしたらいいのか分からないという方でも気軽に参加していただけます。

第5回興行

歌仙連歌 ガード下の巻

平成27年9月20日（日）
於 響&點（イトシアプラザ）
アルバータ（有楽町電気ビル）

（初折の表）	発句	ガード下風流るるや秋彼岸	欣 女	秋
	脇句	サラリーマンの酌み交ふ新酒	峻 坊	秋
	第三	月光に薨の波の洗はれて	芝 女	秋
	四句	跡逐つてゆく猫の足音	壊 殻	雑
	五句	西行のたどる山道春の雪	光 義	春
	六句	千曲の土手にたんぽぽを摘む	六 条	春
（初折の裏）	折立	（初裏の裏移り）		
	初句	水温む河童哀しき夢を食み	らいむ	春
	二句	親指姫は知らんぷりする	欣 女	雑
	三句	壊殻に届いた手紙誘蛾灯	峻 坊	夏
	四句	いそいそと行く小唄の座敷	芝 女	雑
	五句	撥を持つ手に手を重ね冬の菊	壊 殻	冬
	六句	熱き吐息の耳にかかりて	光 義	雑
	七句	朝ぼらけ我が身の裡の望の月	六 条	秋
	八句	おはぎを伴に政治論ずる	らいむ	秋
	九句	知らぬ国ばかりのテレビ鰯雲	欣 女	秋
	十句	どこに勝てるかグループリーグ	峻 坊	雑
	十一句	大騒ぎ花のお江戸の競技場	芝 女	春
	十二句	脚高く上げ乙女舞ふ春	壊 殻	春

（名残の表） 折立

初句	山笑ふ頭のねじをゆるめては	光 義	春
二句	虹の根つこを追ひかけてゆく	六 条	夏
三句	子の刻に待ち合わせする理由のあり	らいむ	雑
四句	私はいつも大物狙い	欣 女	雑
五句	大変だあとひと月でクリスマス	峻 坊	冬
六句	寝言でねだるハートの指輪	芝 女	雑
七句	亡妻の箆笥のこやし質に入れ	壊 殻	雑
八句	今なほ著き君の顔	光 義	雑
九句	鶉鳴く里に幾度通ひけり	六 条	秋
十句	獲物なければ松茸を買ひ	らいむ	秋
十一句	ひしかたの酒池肉林の良夜かな	欣 女	秋
十二句	人をたばかる九尾の狐	峻 坊	冬

（名残の裏） 折立

初句	時雨るるや殺生石を訪ねたる	芝 女	冬
二句	翁に添ひて奥の細道	壊 殻	雑
三句	逃げ水を追うやう生きて若き日は	光 義	春
四句	燕来たりて初恋の詩	六 条	春
五句	花吹雪息できぬほど抱かれて	らいむ	春
挙句	共に生きなむ讃岐の春よ	欣 女	春

句上 欣女（6） 六条（5） 芝女（5） 光義（5）
壊殻（5） 峻坊（5） らいむ（5）